
青きDr.の最後の御話

大輔(だーすけ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青きDr.の最後の御話

【Nコード】

N0030Z

【作者名】

だいすけ
大輔

【あらすじ】

あるDr.が最後の小咄として残したものは………恐怖？
美しさ？それとも、優しさ？

いつまで私は筆をとっていられるだろうか。

そんなことをふと、輪切りにされた檸檬の飾られたアッサムティーを飲みながら考える。

今なら私は何を書くだろうか。そもそも書き出せるかの時点で不明である。

ここ暫くは何も書いていない。必要最低限にしか筆は使わない。今の時代の便利なワープロとやらも、使ったことすらない。

私のような人間が作り出せるものなど、たかが知れている。

見知らぬ街へと行ってしまふようなファンタジア？主人公は人ではなく？

それとも誰か、私の半生に興味がおりか。そんなノンフィクションも悪くない。

間違っことなく、私のペン先は黒い染みを作るだけで、右手の側面に汚れだけを残していく。

雪解けを目の当たりにした物語は春を喰らう。私の故郷は春や秋らしさはあまりない。どいつもこいつも情緒がない。

桜などはただの肴、儂いものの代名詞だがそれもまた使われぬ。あるが、ないものだ。

そうだ、桜で思い出したのだが。ひとつ小咄を話してやろう。私と君らの秘密の話だ。

これは私が体験したことだが、まあ恐れることもあるまい。

桜の下には死体が埋まっていた。いや、それを知っている前提の話だ、急かすのはやめたまえ。それを見たことがあるだろうか。

ある桜は不気味だが美しかった、この世のものとは思えぬほどに。

百年に一度咲く、大紅の桜だ。正式な名はない、普通に見られるものではないからな。

花は真つ赤に燃え、遠くから見れば街ひとつ焼けているように見えるだろう。だが近寄ると大きな桜の木が一本あるだけである。

一番の特徴は何か。花卉が喋るのだ。「もつと綺麗になりたい」といやそれで十分ではないか、と私は言った。

すると花卉たちは一斉にこちらを見、口々に叫んだ。「いやまだだ、まだ足りない」と。

しかしそれでは一体何人喰らえばよいのか。「いや喰らうのは死体だけ。あとはここで眠る人間から少しずつ貰う」

では私のも吸うのか。「お前の血など吸えるか。紫になって百年の努力も無駄になっちまうよ」

そのときだった。私と反対側の幹の向こうから、男たちが何かを運んできた。顔は見えない。それはやはり死体だろうか。

おい、それを喰らうのか、私は聞いた。「見てろ、我々の輝く姿。人間の血でこんなにも綺麗に咲けるのだ」

微かに音を立てて、どうやってか分からないが上手く血を吸っているらしい。桜は赤さを増す。

綺麗だ、と思わず感想を漏らす。

「そうだろう、そうだろう。我々は人の子が想像しうるほど稚拙なものではない」

なるほどな、ではお前、それをいつまで纏う気だ。他の者に見られちまうよ。「お前が特別明るく見えるだけだろう」

本当にお前、ずつとここにいていつていうのかい。「ああいるさ」

また来れば会えるのか。「いや我々は眠らねばならぬからな。確にお前は運が良いのだ、百年に一度の開花を見られたのだから」

運がいいのか、そりゃ良かった。だが会えぬのは寂しいな。かといって百年後は生きていない。「当たり前だな、人間がそんな年まで生きられんだろう。ほら、さつさと行け。葬儀屋に見つかったら死体にされちまうよ。そんなもの、我々がお前の血など吸うのは御免だからな、これ持ってさつさと行けばいい」

桜がくれたのは一輪咲いた小枝。数里先まで照らしそうなそれは、

来た道を戻る唯一の現実。

では、元気だな。「人を喰らう桜にお前は優しいのだな。いや、人は皆優しい。だから我々は更なる美しさを求めるのだ。人が我々を誉め愛でるから」

私は小枝に導かれ、その場を去った。最後に一度振り返ると、やはり堂々とその桜は枝を広げて燃えていた。

では今その桜はどうなったのか。最早それはないのだ。いくら探しても分からぬ。花卉があるうがあるまいが、分かんと思っていたのだが違うらしい。

きっと別の場所で、咲いているのかもしれない。この土地で咲くのが百年後なのだ。

忽然と消えていたのだから、私は夢かとも思った。現で夢。しかしあれが本当に私の思い違いでないと証明するものがある。色褪せたが未だに淡いピンクに光る桜だけ。その一輪は枯れずに咲き続けている。

きっとその一輪が咲いているうちは、あの桜は元気なのだと思う。そう思うことにしている。

それを夢で終わらすにはあまりに甘美で、そして儚いから。

もしかすると、君らの所にいるのかもしれない。ならば君はこういうと良い。

「真つ青なDr. が貴殿を呼んでいる」と。きっとそれだけで桜は嬉しさを募らせるだろう。

このくらいが私に語れる最後の話だ。私は筆を置く。もうインクも書き心地も気にすることもない。私は自由だ。

君らが良い話と出会えることを願って。

……ああ、それと。もしその桜に逢えたならば、宜しく言ってはくれまいか。頼んだぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0030z/>

青きDr.の最後の御話

2011年11月30日12時56分発行